

海の道標 男木島灯台

塩山壽男

SHIOYAMA Toshio
(社) 燈光会 専務理事



写真-1 有人で管理されていた当時の男木島灯台

男木島は、高松港より雌雄島海運フェリーで約40分のところにある高松市沖合いに浮かぶ周囲約4kmの島である。島の北端には、映画「喜びも悲しみも幾年月」の舞台となった男木島灯台がある。香川県産の御影石で作られており、約100年間も実際に使われているもので、灯台官舎を改築した灯台資料館とともに島の名所となっている。夏は海水浴やキャンプなどレジャースポットとしても人気がある。

香川県高松市男木島の北側には、関西と九州を東西に結ぶ海上輸送の大動脈である「備讃瀬戸東航路」という船の通り道があるが、現在、この付近を通過する船はおおよそ900隻/日もあり、明石海峡に次いで全国2位の交通量を誇っている。

まさに「海の銀座」と言えるが、男木島灯台は、この航路に面して立地しており、備讃瀬戸を航行する船舶の安全を見守っている。

男木島灯台は、今から108年前の1895(明治28)年、日本政府の日清戦争直後の海運助成策の推進により、瀬戸内海の海上交通量が増加したために建設された明治中期の西洋式灯台である。

男木島灯台が建設された当時には、職員2名がその家族とともにこの地に住み、孤立した厳しい環境下で灯台の管理を行ってきた。その状況は、日本映画の名作「喜びも悲しみも幾年月」にも描かれている。

現在では、男木島灯台は無人化がなされており、男木島灯台に隣接して、灯台の歴史をテーマとした灯台資料館が設けられている。

男木島灯台は、明治期に多数建造された石造の西洋式灯台のひとつであるが、わが国における西洋式灯台建設事業は、外国人指導のもとにその第一歩を踏み出している。い

わゆる1866(慶応2)年の5月締結の改税約書(江戸条約書)に基づくもので、明治初期に建設された灯台は、この条約を中心に進められたものといえる。

しかしながら、明治も中頃になると灯台建設は、外国人の技術指導から離れ、ひとりだちをした日本人技術者の手によってなされるようになった。

明治年間に建設された灯台の数は、公、私設を含み約200基といわれているが、特に明治中期以降は、海運助成策が推進されたことにより灯台予算も大幅に伸び、わが国主要沿岸灯台のほとんどがこの時期に整備されている。

明治期の灯台は、今なお68基が現用施設として稼働しており、その保存率は立地条件と自然環境の厳しさから考えると驚くほどの高率といえるだろう。

このように明治灯台史ばかりでなく、わが国の建築技術史および建築史上の研究に事欠かない貴重な資料ともいべき建造物が時系列的に多数現存することは、灯台以外にあまり例がないのではないかと。

歴史的価値の高い明治期の灯台について、オリジナリティを保ったまま保存していくことが必要との認識のもとに、現在、これら灯台を運用、管理している海上保安庁において、明治期灯台施設保存委員会が設置され、同庁から委嘱を受けた学識経験者により保存すべき灯台の選定が行われ、現存している明治期の灯台68基のうち、何らかの保存、補修を要する灯台として66基が選定された。

これら灯台の歴史的な価値等を考慮して、保存、補修の方法について、AランクからDランクの4段階のランク付けが行われたが、男木島灯台は、特に貴重な灯台として、保存にあたって、その保存方法を特別委員会で検討する必要のあるAランクに属する灯台23基のうちのひとつに選定されている。



図-1 男木島灯台位置図



写真-2 現在の男木島灯台



写真-3 併設されている灯台資料館



写真-4 御影石の階段

同灯台は、建設から100年以上も経過しているが、表面の風化が少ないうえ、構造が素晴らしく、男木島灯台の上部へ登らせん階段も、全て御影石造りとなっており、保存状態がきわめて良好で、今なお建設当時の姿を残しており、訪れる人を驚かせる。

同灯台は、基礎部に1階構造の石造付属舎を有し、地上から頂部まで約14mの高さを有する円形の石造構築物であり、灯塔の2階まで石のらせん階段が続き、2階と3階の間には、青銅製の鋳物梯子が円形状に連結されている。その上の階は、灯室および踊場となっている。

最上部には、頂部に避雷針を有するドーム型の灯ろうがあり、灯芯部には、床上高さ約5mの分銅筒がある。付属舎の屋根は、木造小屋組み（銅板葺き）で、内部は縦羽目板張り仕上げとなっている。

同灯台に使用されている石材は、香川県産の御影石が使用されているが、香川県は良質の御影石が産出することで

全国的に有名であり、採出される岩石は「庵治石」の名で知られている。

庵治石は花崗岩の一種で、石英と長石を主成分とした少量の黒雲母と角閃石を含む硬い岩石で、構成鉱物の一つ一つの結晶がきわめて小さく、結合が緻密なため他地域の花崗岩に比べて硬いのが特徴であり、水晶と同じ七度という硬度のため細かな細工が可能で、水を含みにくいため風化・変質にも強く、200年は彫られた字が崩れたり、赤茶色に変色したり、艶がなくなったりしないといわれ、世界の石材の中でも類がないといわれている。

通常、日本の灯台の外壁には、赤色または白色等の塗装がなされているが、同灯台は、庵治石を使用している関係から外壁の塗装がなされていない珍しい灯台で、このような方式は、日本にある約3300基の灯台のうち、男木島灯台を含めて2か所しかないといわれている。